

前回の立命館アジア太平洋大学(APU)の学生が営む子ども食堂「灯(ともしび)」に続き、多世代交流活動への取材第2回目です。

今回は大分駅の南側に位置する上野丘、金池地区にある「金池こども・みんなのひろば」へ取材に伺いました。どうぞ、ご覧ください！

金池こどもみんなのひろば

文責：松山孝太郎（福祉健康科学部社会福祉実践コース2年生）、山崎麻（福祉健康科学部社会福祉実践コース1年生）

写真提供：坪山明寛氏

■ 地域のひろば

「金池こどもみんなのひろば」は、毎月第2、第4土曜日に手づくりの昼食を含めた様々なプログラムを企画、運営しています。参加する子どもたちは、金池小学校と連携して、大人や学生たちが見守る中で安心して遊ぶことができます。ボランティアメンバーには、最高齢90歳の方も積極的に参加しており、多世代が集う地域のひろばでもあります。通常使用している屋内の会場は、かつてご主人と宗さんが絵画教室兼アトリエを営んでいた場所で、ご主人が描かれた素敵な油絵がたくさん飾られていました。高い天井も相まって、何だか自分が「この場所」に受け入れられているような、そんな不思議な気持ちになりました。

今回、私たちが参加したプログラムは、屋外の会場で、自然観察指導員、通称「森の先生」と一緒に自然と触れ合い学びながら上野丘墓地公園までの山道を歩き、お昼ご飯をみんなで食べるというものでした。

■ 森の先生と子どもたち

当日、集合場所では子どもたちがみんな元気にあいさつをしてくれました。皆で連なり、山道を進みますが、子どもたちはエネルギーで興味津々、いろんなものに興味を抱いては、すぐに他のことに興味が移り、次々と疑問を投げかけてきます。森の先生はそんな子たちの疑問に言葉だけではなく、実際に自然の物を使って楽しくて面白いものを作り、興味を引きながらその疑問に答えていました。

たとえば、「シュロの木の皮でロープを作れるんだよ」、「木の実であわあわの石けんがつくれるんだよ」など、「森の先生」は知識の宝庫で、わずか数メートル進むのにも40分ほどかかり驚きました。それも、子ども達が「いろんな形のどんぐり」や「面白い形の葉っぱ」、「いろんな種類の虫や鳥」など、自然の“発見”にぐいぐいひきこまれたからこそであり、自然と目で見たものが知識としてどんどん入っていく姿に私も驚きました。私は子どもたちが驚いたり笑ったりする姿がとても印象的で、とても素晴らしいと思いました。なぜなら、このように子どもたちが地域のことを知る機会があることは、故郷を好きになり故郷を更に良いものにしようという気持ちを育むことにもつながると思ったからです。

山道を歩きながら、子どもたちはもちろん、子どもたちの保護者、ボランティアの方々など多様な年代の方々が参加していて、それぞれの関係づくりが見られました。子どもたちにとって上の年代の人たちと触れ合う機会は家族以外となると貴重で、とても良い経験になると感じました。また、ボランティアの方々が松の葉っぱを使った手裏剣の作り方を教えてくださった時、子どもたちもお互いに教え合いながら手裏剣を作る姿に、活動を通じてお互いの交流を深めることの大切さを感じました。

山道を抜けて公園に着くと、シートを広げて、まるで子ども会のピクニックのように皆でお弁当を食べ、不思議と懐かしい気持ちになりました。旬の栗などの食材を使ったとても美味し

い手作り弁当を頼張りながら、子どもたちが食に興味を持つ環境にもなるのではないかと感じました。

■学びから気づき、地域のための活動へ

「金池こども・みんなのひろば」は、6年前の2016年10月から始まった子ども食堂です。きっかけは、代表者の宗矩子（そうのりこ）さんが7年前に受講した大分大学の公開講座（コミュニケーション入門Ⅰ）でした。授業レポートの為に藤田孝典著『貧困世代』を手にとり、大学生の貧困問題、いわゆる、卒業しても非正規労働者となり、借りた奨学金の返済に追われ次世代に貧困が連鎖する問題を知りました。この時、次世代の「子どもたちの未来を守りたい」という思いが芽生えたそうです。

その後、宗さんは金池校区にある「ボランティア金池」のメンバーにその想いを相談し「金池子ども食堂（開設当時の名称）」を立ち上げます。コアメンバーの坪山さんは、当時を振り返り、「あの頃は寄付も補助金も限られたもので『宗さん、おやつがこの予算では買えませんよ』って、持ち出しすることもしばしばでした」と懐かしそうに話されている姿が、とても印象的でした。

いわば「手弁当」で始めた「金池子どもみんなのひろば」は、今では赤い羽根共同募金やフードバンク、飲料メーカーなどの寄付や、地域の保護者など、多くのボランティアに支えられて継続しています。坪山さんはここまでを振り返り、「宗さんが、『地域のために活動しよう』と思う、ぶれない心があるから周りの人たちは自然について来るんですよ」と話されていました。

■「みんなのひろば」としての子ども食堂

宗さんから、「子ども食堂」という名前のイメージが貧困と結びつきやすく、参加することへの抵抗やストレスがあるため、活動途中で「金池子どもみんなの”食堂”」から、現在の「金池子どもみんなの”広場”」に名前を変えたそうです。実は私も、この活動に参加するまで、「子ども食堂」とは、何らかの事情によって家庭で食事をとることが難しい子どもたちが集まる場所というイメージを勝手に抱いていました。しかし、最初は人見知りをしていた子どもたちが、帰る頃には仲良く話している光景を目にして、子ども食堂には地域のつながりを強固にし、地域住民同士の絆を深める効果もあることを実感しました。

みんなのひろばとしての子ども食堂は、みんなの憩いの場であり、コミュニケーションの場になっていました。金池こどもみんなのひろばをはじめ多くの”子ども食堂”は、子どもに限らず誰でも訪れることができるそうです。それに、訪れる理由も人それぞれでいいのです。そのような場を地域に作ることで自体が大切なのでしょう。宗さんのお話を伺う中で、宗さんがどんなに素晴らしい人なのか伝わってきて、ボランティアの方が多数集まるのも納得できました。

■取材を終えてー実践を通じて理解を深めるー

私は以前から子ども食堂に興味を持っており、子ども食堂の取材担当の募集が出た時、すぐに挑戦しようと心に決めました。実際に参加して取材したおかげで、自分の思い込みに気が付き、さらに興味が湧いて、これからの学びの意欲となりました。自分の考えている将来にも大きく関わってくることで、これをきっかけとして大分県内の子ども食堂に行ってみようと思うことができました。

「子ども食堂」という実践を、福祉の理論で学んだことと結びつけて、理解を深めていきたいと思います。



宗さん宅キッチンでお弁当づくりが行われる



当日のお弁当には旬の果物、野菜が盛り込まれ、味、栄養ともに抜群



上野丘墓地公園までの山道。大分駅から徒歩 20 分以内の都市圏にも関わらず自然とふれあえる。森の先生の説明により、森が広大な学習フィールドに。大人も子どもも興味津々で歩く歩く



葉っぱの穴から何が見えたかな？



ピクニックのようにみんなで美味しいお弁当を頬張る